



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『平中物語』第三十二段と『伊勢物語』：本文改定案とともに
Author(s)	後藤, 康文
Citation	国語国文研究, 146, 1-11
Issue Date	2015-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93164
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_146_01-11.pdf



『平中物語』第三十二段と『伊勢物語』

——本文改訂案とともに——

後 藤 康 文

一 ささやかな目的

この男は、とにかく色恋のプロセスを楽しむ。機知に溢れた歌の贈答やことばの駆け引きを、ひたすら楽しんでゐる。その姿はまるで、結果など二の次といわんばかりだ。そして、「やみにけり」という終止符に幾度となく促され、読者もおのずから次のエピソードへと目を転じてゆく。すると、物語も終盤にさしかかったあたりで、このような話に出くわすことになる。

又
また、この男、いひみいはずみ、ものいひすさぶる人ありけり。
さのみものはかなくてありわたるに、おのづから年月経にけり。
男、音せねば、女のもとより、①しもつきのついたちの日、いひたる。「年は幾年にかなりぬる」といひたるに、あやしがりてかぞへければ、三年といふついたちの日にぞありける。

いにしへのことのたとひのあらたまの年の三年に今日こそ
はなれ
返し
古りにける年の三年をあらためてわが世のことと三千年を
待て

男、

心よりほかに命のあらざらば三千年をのみ待ちは過ぎぬさじ
といひて、この男、「いとひさしきことのたとひに過ぎぬべし。
なほ、よそにてだにいかでものいはん」とぞいひやりける。女、
「われと人やりてや、よそにてもあふべき。この春夏過ぐるこ
をだにくし。②かつことにして秋を」とぞいひおこせたりけ
る。男、

あふみ路に天の河原を渡ればや言の契りに秋を頼むる
返し
秋待てと人を頼むる言の葉は露にうつらぬ色ことにせん

男、返し

露にうつる紅葉散らずは秋待てといふ言の葉を何かわびまし

女、いかが思ひけん、あひかたらひにけり。

(静嘉堂文庫蔵本・四六ウ〜四八オ)⁽¹⁾

「男↓女↓男」という三首一組のやりとりが二度繰り返されるこの話。すなわち、『平中物語』第三十二段⁽²⁾について、傍線部本文二箇所の合理的改訂と『伊勢物語』受容の十全な解明とを同時に図ることが、とりもなおさず本稿のささやかな目的である。なお、行論の都合上、中ほどの「とぞいひやりける」までを前半部、「女」以下を後半部と呼ぶことにする。

二 第三十二段後半部と『伊勢物語』

さて、本段前半部が、よく知られた『伊勢物語』第二十四段の序盤、

昔、男、片田舎に住みけり。男、「宮仕へし」とて、別れ惜しみて行きにけるまゝに、三年来ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、「今宵あはむ」と契りたりけるに、この男来たりけり。「この戸開けたまへ」とたたきければ、開けて、歌をなんよみて出だしたりける。

あらたまの年の三年を待ちわびてただ今宵こそ新枕すれ

(学習院大学蔵本・二四オウウ)⁽³⁾

を踏まえて成り立っていることは早くから指摘されてきており、またそれは、一読するに自明なことがらでもあった。

女は、間遠な文通が始まってから今日でちょうど三年になる、「三年」といえばそうだからの悲話、「あらたまの年の三年」だと機知を働かせ、男がそこまで気がつくか否かを試した。もとより熱情を抱く相手ではなかったので、男は最初不可解に思ったが、数えてみると「三年」、なるほどそういう含みを持たせた問いかけかと合点し、「出典が露骨にわかる歌を詠んで解答してみせたのだ。昔の『伊勢物語』の先例と同じく、私たちもとうとう、新枕を交わせる『三年』を迎えたというわけですね」と。女はこれに応じて、「古色蒼然たるあの話、そして、いたずらに過ぎ去ってしまったこれまでの『三年』間を一新して、今日から私たちが新しい物語を創りましょうよ。そうね、お逢いするまであなたには、かわいそうな彼女の千倍、『三年』の歲月を待ちいただくことにするわ」と切り返す。西王母の仙桃に準えて「三千年を待て」とはおもしろい。だが、何ともは無茶な要求ではないか。だからこそ男は、「私にその寿命が保証されないかぎり、『三千年』後をひたすら待つて過ぐすなんて不可能でしょう。人間どう頑張ったってそんなに永く生きていられる道理はないのですから、あなたが私に突きつけた条件は、あまりに悠長な逢瀬の譬えとして、むざむざと時の流れに埋もれてしまふに決まっています。私としてはやはり、今日という記念すべき日に、せめて物越してもいいから何とかしてお話したい」と、俄然燃え立つて

くることになるわけだ。そしてここまでは、およそこうした理解でよいと思う。

これに対して、後半部はどうだろう。従来の研究では、ただ単に三首の歌が詠み交わされ、どういう風の吹き回しか知らないが、女は男と契りを結んだのだと解釈されているようだ。しかし、はたしてそれだけののだろうか。おそらくそうではあるまい。いや、そんなはずはないのだ。なぜならば、当時すでに「いにしへのことのたとひ」であり「古りにける」話であつたにせよ、本段前半部は『伊勢物語』第二十四段の世界を強かな抛り所にして成り立つていたのだから、彼らが紡ぎつづけた後半部の贈答についても、同様の確たる背景が認められてしかるべきだと考えられるからである。女と男は、終始『伊勢物語』の「相对化」に勤しんでいたはずなのだ。

となれば、もう見えてくるだろう。後半部を支えている「背景」とはすなわち、同じ『伊勢物語』の第九十六段であることが、今、その全文を掲出しよう。

昔男ありけり。女をとかくいふこと、月日経にけり。石木にしあらねば、心苦しと思ひけん、やうやうあはれと思ひけり。そのころ、水無月の望ばかりなりければ、女、身に瘡ひとつふたつ出で来にけり。女、いひをこせたる、「今は、何の心もなし。身に瘡もひとつふたつ出でたり。時めいと暑し。少し秋風吹き立ちなん時、かならずあはむ」といへりけり。秋待つころほくに、こかしこより、「その人のもとへ去なむずるなり」とて、口舌出で来にけり。さりければ、女の兄人、にはかに迎へに来

たり。されば、この女、楓の初紅葉を拾はせて、歌をよみて、書きつけてをこせたり。

秋かけていひしながらもあらなくに木の葉降りしくえにこそありけれ

と書き置きて、「かしこより人をこせば、これをやれ」とて、去ぬ。さて、やがてのち、つひに今日までしらず。よくてやあらむ、あしくてやあらん、去にし所もしらず。かの男は、天の逆手を打ちてなむ、呪ひをるなる。むくつけきこと。人の呪ひごとは負ふものにやあらむ、負はぬものにやあらん、「今こそは見め」とぞいふなる。

(七一ウ〜七三オ)

昔、男が、ある女をしぶとく口説きつづけていた。相手の女として血の通う人間であつたので、そんな男の姿に心を痛めたのか、しいしだいに彼を愛しく思うようになった。ところがあいにくなことに、その時節が暑さのきびしい六月十五日ごろであつたため、女からだにできものがぼつぼつと出来てしまった。そこで女は、「現在の私は、あなたに対して従順な気持ちしかありません。ただ、この身におできが一つ二つと出来たのです。それに、お逢いするには今はとても暑い時季。ですから、少し涼しくなつて秋風が吹きはじめると、きつとお逢いしましょう」と、男にいつてよこしたのだった。ところが、男が期待に胸を高鳴らせて秋の到来を待っていたちやうどそのころ、いったいどこから漏れたのか、方々から、女がその男の所へ行こうとしているようだといって、苦情が出てきてしまつ

たのだ。だから、女の兄がすぐさま迎えに来て女を保護する事態に立ち至ったのだ。そこで、どうにかたがなくなつた女は、「楓の初紅葉」に「涼しくなつたら必ずお逢いしましょうと申し上げた、そのお約束どおりにはなりませんでしたのに、むなしく秋だけがめぐつて来ました。あなたと私とは、紅葉した木の葉が降り敷く入江のように、浅いご縁だったのですね」という伝言の一首を残して、立ち去るほかなかった、という話。後統部分には、自分を裏切つて姿を晦ました女を「天の逆手」を打つて呪い、「そのうち天罰が下るぞ」と吐き捨てる男の様子が伝えられていて、『伊勢物語』の主人公像としてはきわめて異例な、「むくつきき」印象を与えずにはおかない。

以上を頭に入れて、『平中物語』第三十二段の後半部に目を向けると、一首目の「言の契りに秋を頼むる」、二首目の「秋待てと人を頼むる言の葉」、そして、三首目の「紅葉散らずは秋待てといふ言の葉」が、すべて『伊勢物語』第九十六段を「背景」に置いていること、措辞としては傍線部に基づいていることが、おのずと察知されるのではなからうか。要するに二人は、終始『伊勢物語』の世界に寄りかかつて、彼らの一回的色恋のプロセスを知的に楽しんでたといふわけである。

いや、それだけではない。女が男と「あひかたらひにけり」というこの章段の結末は、『伊勢物語』のそれを裏返しにしたものであるし、前半部の「いひみいはずみ、ものいひすさぶる人ありけり。さのみものはなくてありわたるに、おのづから年月経にけり」も、実は、『伊勢物語』第九十六段の波線部「女をとかくいふこと、月日

経にけり」を明確に意識し、これを逆手に取つてみせた箇所だったのである。すなわち、登場人物のみならず、『平中物語』の作者も、聖典『伊勢物語』の「相対化」に工夫を凝らしていた実態が浮き彫りになる、ということなのだ。なお、『伊勢物語』第九十六段の話が、『平中物語』第三十二段後半部のみならず、前半部にまで浸透している事実については、次節での考察をとおしてただちに明らかにする。

三 「しもつき」と「かつことにして」

『平中物語』第三十二段には、あらかじめ改訂を施してある部分のほかに、傍線部①「しもつき」および②「かつことにして」の二箇所本文をいかに考えるべきか、という長年の懸案が横たわっている。本節では、先に指摘したことがらを念頭に置いたうえで、これら二つの「難題」をすつきりと説明してみたい。

まずは、①の「しもつき」。この部分に関しては、従来、「霜月」とそのままに読む立場と、「文月（七月）」に改訂する立場とが対立しており、注釈書の単純な数からいうと、前者の方が圧倒的に優勢であるようだ。が、「霜月」説がまったく採るに足らないことは、何人の目にも明らかなのではなからうか。女は後に、「この春夏過ぐることをだにくし」といい、「秋を」待てといっているのだから、それに先立つて「年は幾年にかなりぬる」と問いかけたその日が、「霜月のついたちの日」であろうはずがない。述べるまでもないことだが、「この」とは「今年の」の意である。すでに仲冬に入る十一月一日になつて、「今年の秋を待て」と通告する道理がどこにあるという

のだろうか。「誤写説はなるべくなら取りたくない」というただそれだけの理由から、

「霜月のついたちの日」をそのままに認め、夏の終り頃に「この春夏過ぐることだに^マくし。かつ、ことにして、秋を^シといひ、その秋もまもなく終り、今十一月一日を迎え、「いかかと思ひけむ、あひ語らひにけり」という結末になったと解したい。⁽⁵⁾

といった類の奇妙な説明をされても、正直困惑せざるをえないのだ。したがって、この本文はどうしても改めるほかないのであり、結論からいえば、もう一つの「文月」説が正しい。「文月のついたちの日」といえば、太陽太陰曆上の「秋」に入るまさにその日である。

「霜月」では曆上特別な意味を持たなかった①の本文が、「文月」に改訂されることによつてにわかには有意義な指標へと変貌し、同時にそれは、女のことば「秋を」とも見事に呼応することになる。そして、その「背景」には、女が「少し秋風吹き立ちなん時、かならずあはむ」といひ、男が「秋待つ⁽⁶⁾」という『伊勢物語』第九十六段の構図が厳然としてあるのだ。

なお、この箇所の誤写については、

「り」の末筆が異常に伸びて「し」一字が分離することは往々にして見られる本文転化の一例である。有名な青谿書屋本土佐日記に「よめり」が「よめりし」となった例がある。「ふ(不)」↓「も(无)」の字形相似による転化も多い。故に「女のもとよ

りふつきの」から「女のもとよりしもつきの」に転化したものと認めて、私に改む。⁽⁷⁾

といった仮名レヴエルの過程を説くものと、

後文に、「この春夏過ぐることだに^マ憎し」とあることや、後出の歌に「天の川原」が出ることから、「しもつき」は、もと「十一月」と書かれ、「七月」の誤写とも考えられる。⁽⁸⁾

と、漢字レヴエルの過程を想定するものがある。判断のむずかしところだが、本稿では、後者により蓋然性ありと認めてこれに与しておく。

ついで、②の「かつことにして」。この難解箇所については、諸注悪戦苦闘している。本文をそのまま理解しようとするものが大多数を占め、

・又、ものごしと違つたおあいのし方、――本当の結婚――は秋をその期といたしましうね。⁽⁹⁾

・「本文ヲ」「かつことにして」「トシ」その上もう秋だわ。／「かつごとにして」は「加うるに」の意である。／「かつごと」とは珍らしい用例である。この場合に適用される動詞で「かつ」を終止形にする動詞に二つある。一つは餅を春く意味の「搗つ」であり、他は加える意味の「糅つ」である。前者は四段活用その他動詞、後者は下二段活用の他動詞である。「かつごと」は名詞「こ

と」につづいている故に、「かつ」を連体形と見なければならぬのであるが、意味の上からは、後者に強く惹かれる。副詞「且つ」も「かつがつ」も、その語源は、通説の如く、名詞「片」にあるのではなく、「かてて加えて」の意味の動詞「かつ」にあるのではないかと思う⁽¹⁰⁾。

・でも、おなじことですから、秋をお待ちください／「かつ」は、「憎し」とは思うもののいっぽうでは……という気持ち。「こと」にしては、難解であるが、同じことだと考えてと解した。⁽¹¹⁾

・(しかし)一方では、これまでのことはそれとして、秋を(期待しなさい)／「かつ」(副詞)は一方ではの意。「ことにして」は「事にして」か。「事にす」はよいとする、よいことにするの意。⁽¹²⁾

などと、さまざまな説明ないし解釈を試みているのだけれども(傍線筆者)、いずれにもとうてい従うことはできない。そして、こうした注釈の現状それ自体が、②本文が何らかの誤写を孕んでいることを強く示唆しているといえるだろう。一方、今までに唱えられた唯一の具体的本文改訂案、

「本文ハ「かつことにして」デ」「かたことにして」か。(物越しで逢うことは)、片言ということにして。／難解である。諸説の紹介は、「全講」にゆずる。まず状況設定であるが、「霜月」(五行)を「七月」の誤りとすることは考えないで、何とか解いてみたい。そうすると、「この春夏」は、歌のやりとりの行なわれている年の「春夏」のことで、言いかえれば、「今年の春夏」で

ある。「過ぐる」は「通りすぎる」ことだから、「消息なしで春夏がすぎた」ことをいう。そのことを「憎し」と言っているのである。この年のことだから、「過ぐる」と現在形を用いたが、口語訳すれば「過ぎた」となろう。ところで、「春夏」とあれば、次は「秋」だ。「秋」と言えば、「七夕」を連想する。それは、牽牛星と織女星とが逢うことであり、契りを結ぶことである。この「秋」は、そういうことを象徴しているのではないか。それならば、ここに出てくる「秋」が、時期的に合わない(今)は今十一月であるのに、秋のことをいうのはおかしい、という意味で、かまわない。「秋」は、次の「秋待てと人を頼む」の歌から推して、「秋を待て」、すなわち、「結婚することを期待せよ、希望せよ」の意と考える。「を」は格助詞である。そこで、「かつことにして」を「かたことにして」の誤写とした。「よそにても逢ふ」ことは「かたこと」にして、の意とみるのである。以上をまとめると――、男が「よそにでだに。いかで、もの言はむ」と言ってきたので、女の方は、進んで人をやって、こういった。「ねえ、ちよいと、よそながらにでも会いましょうよ。この春夏は何の音沙汰もなしで過ぎてきたことさえ嫌なんだから。(それにしても、よそながら逢うなんていや、そんなことは)こどもの言うおさなごととして、契りを結ぶことを、あなたは望みなさいよ。(わたしは結婚するつもりよ。)」ただし、以上は補注六六の(一)に従った場合の訳である。(二)に従うと次のようになる。「ねえ、ちよいと、よそながらにでも会うなんていや。この春夏を何の音沙汰もなしで過ぎてきたことさえ嫌なん

だから。そんなことは片言として、結婚することを考えなさい。⁽¹³⁾

はどうかという(傍線筆者)、一読して明らかなとおりに苦し紛れの暫定案と評するほかに、残念ながらもまったく問題にならないのである。

そこで、思いあわせるべきが『伊勢物語』第九十六段なのだ。同話で女は、「少し秋風吹き立ちなん時、かならずあはむ」と男に告げた。これは、男に対する近い将来の逢瀬の「約束」だった。と、このように考えてくると、②本文の有力な改訂案が自然と浮上してくるのではなからうか。つまり、「かつ、ことにして」は「かねごとにして」の誤りではないのか、ということである。「かねごと」とはすなわち「予言」で、

・何の心ありて、あすは檜の木とつけけむ。あぢきなきかねごとなりや。

(『枕草子』「花の木ならぬは」の段／新編日本古典文学全集・九三頁)

・などか、いとさことの外にははべらむ。中将などのいと二なく思ひはべりけんかね言にたらずといふばかりにこそははべらめ。(『源氏物語』常夏巻／日本古典文学全集③・二三三頁)
・院も、事のついでに、もし世の中思ふやうならば、ゆゆしきかね言なれど、尼君そのほどまでながらへたまはなん、とのたまふめりき。
(同若菜上巻／同④・一二三頁)

等の例に照らすまでもなく、前々から予想して述べていたこと、あらかじめ言い置いておくことば、の意。そして、この語が男女間で用いられる場合には、

大納言国経朝臣の家に侍りける女に、平定文いとしのびてかたらひ侍りて、ゆくすゑまでちぎり侍りけるころ、この女にはかに贈太政大臣にむかへられてわたり侍りにければ、ふみだにもかよはすかたなくなりければ、かの女の子のいつつばかりなるが、本院のにしのたいにあそびありきけるをよびよせて、ははに見せたてまつれとてかひなにかきつけ侍りける
平定文

・昔せしわががね事の悲しきは如何ちぎりしなごりなるらん

(『後撰和歌集』卷第十一・恋三十七一〇／新編国歌大観)

という、ほかならぬ「平定文」の名歌に代表されるように、二人の将来を契る「約束」を意味することになるのである。「かねごと」が「にして」(格助詞「に」+サ変動詞「す」の連用形「し」+接続助詞「て」)に連なるのは、

題しらず
よみ人しらず

・竜田河錦おりかく神な月しぐれの雨をたてぬきにして

(『古今和歌集』卷第六・冬一三二四／新編国歌大観)

・かかれど、この歌をひとり言にして、やみぬ。

思ひやる心は海を渡れども文しなれば知らずやあるらむ

・忠こそその阿闍梨も大願を立てて、^{あざり}聖天の法を不斷に行ひ、^{だいぐわん}加持^{かぢ}したる水を硯水にして奉れたまふ。

（『うつほ物語』 菊の宴／新編日本古典文学全集②・六六頁）

などの用例に鑑みれば文法上合理といえようし、「ね」から「つ」への本文転化についても、「瀬」↓「津」「川」の誤写が想定可能だろう。『平中物語』のこの女は、『伊勢物語』第九十六段の世界を伏線に（「私たちの逢瀬の」お約束にして、秋（の訪れ）を（お待ちください）」、語順を改めるならば「秋をかねごとにして、」＝「秋（の訪れ）を（私たちの逢瀬の）お約束にして（お待ちください）」と、男に告げてきたのではなかったか。

ところで、右に述べたことをかりに受け容れるとしても、「七月一日」に「秋を」待てと「約束」する道理がどこにあるのか、という疑問の声が当然のごとくにあがつてこよう。しかし、まさしくその点にこそ、本段後半部を支える彼らの機知と諧謔が込められていたと知るべきなのである。暦の上で「秋」になったその日に「秋を」待つことを「かねごとにして」いるからこそ、そこに絶妙なおもしろさが生じるのだ。二人はこの上なくタイムリーな「かねごと」を種に楽しんでいる。そして、女にはもちろん、その夜の男と契りを交わす用意があった。今、後半部三首の大意を記すなら、およそ次のようになろうか。「近江路ならぬ（男女が）逢う道として、牽牛星が（年に一度）天の川原を渡る時季だから、あなたは（あの話の女と同じように）口約束として私に秋を（待て）」と期待させるので

しょうか。（もつとも、たとえ肩透かしを食らうことになっても、私はあの男のように「天の逆手」を打ってあなたを呪うような愚かなまねはしませんかね）。「秋（になるのを）待つてくださいとあなたを当てにさせる私のお約束の言葉は、露が置いても変色しないその色を、一段と際やかにすることでしょう。（私のお約束は固い決意に基づいていますから、不履行ということはありません。あの『伊勢物語』の女とはまるで違いますわ）。「露によって変色する紅葉が散らないなどという奇跡が信じられるなら、あなたから「秋を待ちなさい」というおこぼをいただいて、どうしてやりきれぬ気持ちになることがありましようか。（結局はあなたの「言の葉」も紅葉して散り、「木の葉降りしくえ」となるのですね。あなたの口約束は所詮空手形に終わるのであって、秋になっても私と逢うおつもりなどこれっぽっちもないのでしよう。そう思うと切なくてどうしようもないのです」。

なお、末尾一文に見える「いかが思ひけん」という草子地もまた、『伊勢物語』第九十六段を前提にしているものと思われる。すなわち語り手は、心ならずも男を裏切る結果になったあの女を気取っていたはずなのに、この女が「約束」どおりあつさり男と「あひかたら」ったことを、「いったいどういう料簡なのだろうか」と、わざとらしく訝つてみせているのである。そのように読まなければ、この草子地はうまく解釈できないのではなからうか。

四 『平中物語』 研究のむずかしさ

—— 結びに代えて

『伊勢物語』はいわずもがな『大和物語』に比してさえ、同じ『歌物語』の一つとされながら『平中物語』に関する年間論文数は驚くほど少ない。それほどこの作品の価値は低いのだろうか。あるいは、研究者たちを惹きつける魅力に乏しいのだろうか。それとも、これぞ『新参者』の悲哀なのか、などとおれこれ思案してみたが、どうやらそうしたことが理由ではないらしい。そうではなく、『平中物語』研究が活性化しない最大の原因は、その基盤となる本文整理および注釈作業の、依然とした未熟さにあると考えられるのである。迂闊には手を出せないし出すと危ない、だから、触らぬが得策というわけだ。

『平中物語』研究のむずかしさは、とりもなおさずこの点にあるのだと思う。この作品は、昭和六年（一九三一）に山岸徳平・川瀬一馬両氏が静嘉堂文庫蔵本を発見紹介した⁽¹⁾ことによりその伝存が初めて世に知られ、以後、目加田さくを・萩谷朴両碩学を中心に注釈を含めた基礎的研究が精力的に推進された。しかしながら、今日なお本文の損傷箇所は多数放置されたままであり、また、本文解釈の定まらない部分も少なからず残されているのである。『とはずがたり』などと同様、孤本を相手にする厄介さと限界は認めざるをえないし、ところどころに潜むこの物語固有の（とみるほかない）表現や語法が『幻惑』を誘発している面もあろう。だが、いや、だからこそ、

『学者』を名乗る者は断固として立ち向かわねばならないのではない。誤写箇所の復元を主とするより厳密な本文の整理と分岐している解釈の確定に向けて、まずは全力を傾注すべきなのだ。主人公像がどうのこうのなどとやかく批評するのは、その後でよい。かつて初段の誤読について論じたのに引きつづき、本稿では、第三十二段と『伊勢物語』第九十六段との深い繋がりが、二箇所の誤写を見極める手続きと相補うかたちで明瞭に浮かび上がってくることを、右に表明した所信の実践として述べてみた。

それにしても、「誤字説は論外」だとか「現存本文を改めてまで」といった旧弊な言説を目にするたびに、密かにこう思うのである。それは、おのれの怯懦、あるいは不明の自白にほかならないのではないかと。

注

(1) 『平中物語』の本文は、目加田さくをを編『平中物語 冷泉為相卿筆』（武蔵野書院、昭三三）の静嘉堂文庫蔵本影印に拠る。なお、ゴチック体で示した二箇所の「に」は底本にないけれども、脱落とみて私に補った文字である。また、男の「心より」歌は、底本では地の文中に「混入」しているが、他の和歌と同じく二字下げで独立改行した。書写行為に伴う和歌の地の文化とその機序については、岡田貴憲『和泉式部物語』諸本論の再検討——和歌書式の問題を手がかりに——（『中古文学』第九〇号、平二四・一一）を参照されたい。

(2) 本稿では、『平中物語』の章段数を全三十八段ないし三十九段とする見解に従った。ちなみに、全四十段とみる立場に立つなら、本段は第三十三段となる。

(3) 『伊勢物語』の本文は、鈴木知太郎校注『天福本 伊勢物語』(武蔵野書院、昭三八)の学習院大学蔵本影印に拠る。

(4) 底本、「まつ」の「ま」の字の右に「た」の傍記がある。定家本系諸本内においても、武田本・流布本等は「たつ」に作る。池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究(校本編)』(有精堂出版、昭三五)、二五六頁参照。ここは、「万(ま)」と「多(た)」の字体相似に起因する誤写が容易に想定できるケースである。下接する「ころほひ」との繋がりがらずれば「秋立つ」の方が望ましい形といえそうだが、底本本文「秋待つ」のままでも十分読める。

(5) 森本茂『平中物語全釈』(大学堂書店、平八)、一八六頁。ただし、注4で紹介した「秋立つ」の異文に依拠した場合には、陰暦「七月一日」よりもその年の「立秋」を念頭に置くのがふさわしいといえよう。参考までに、平定文の生きた時代である仁和(八八五)から延喜(九九二)に至る期間の立秋の日を、湯浅吉美編『増補 日本暦日便覧 上』(汲古書院、昭六三)に拠って年ごとに示すと、以下のごとくである。仁和元年(有閏三月)・六月十八日/同二年・六月二十八日/同三年(有閏十一月)・七月十日/同四年・六月二十一日/寛平元年・七月二日/同二年(有閏九月)・七月十三日/同三年・六月二十四日/同四年・七月六日/同五年(有閏五月)・六月

十七日/同六年・六月二十七日/同七年・七月八日/同八年(有閏正月)・六月二十日/同九年・七月一日/昌泰元年(有閏十月)・七月十一日/同二年・六月二十二日/同三年・七月五日/延喜元年・閏六月十五日/同二年・六月二十六日/同三年・七月七日/同四年(有閏三月)・六月十八日/同五年・六月二十九日/同六年(有閏十二月)・七月十日/同七年・六月二十一日/同八年・七月三日/同九年(有閏八月)・七月十四日/同十年・六月二十四日/同十一年・七月六日/同十二年(有閏五月)・六月十七日/同十三年・六月二十七日/同十四年・七月八日/同十五年(有閏二月)・六月十九日/同十六年・七月一日/同十七年(有閏十月)・七月十二日/同十八年・六月二十三日/同十九年・七月四日/同二十年・閏六月十六日/同二十一年・六月二十六日/同二十二年・七月七日。『平中物語』第三十二段の「秋」をかりに「立秋」の意とみるならば、七月一日以降にこれを迎えた年の話となるのだけれども、その方向で考える必要のないことは、本節終盤で明らかにする。

(7) 萩谷朴『平中全講』(赤堤居私家版、昭三四)、八六頁。

(8) 清水好子担当『日本古典文学全集 竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』(小学館、昭四七)、五二三頁。なお、同書の本文は「しもつき」。ちなみに、漢字「七」から「十一」への転化を初めて唱えたのは、『現代語譯日本古典文学全集 更級日記・平中物語・篁物語・堤中納言物語』(河出書房、昭二九)においてこの物語の訳注を担当した、秋山虔氏である。

- (9) 目加田さくを『平仲物語新講』（武威野書院、昭三三）、一二五頁。
- (10) 注7書、八五／八七／八九頁。
- (11) 注8書、五二四／五二五頁。
- (12) 注5書、一八五／一八七頁。
- (13) 遠藤嘉基担当『日本古典文学大系 簗物語・平中物語・瀧松中納言物語』（岩波書店、昭三九）、九三／一二〇～一二一頁。
- (14) 川瀬一馬「大和物語の異本と平中物語の發見」（『國文學誌』第一卷七／八号、昭六・一一～一二）。
- (15) 「『平中物語』 初段の時間構造——誤写説の見地から——」（『國語國文』第六十八卷十二号、平一一・一二）↓拙著『日本古典文学読解考——『万葉』から『しのびね』まで——』（新典社、平二四）所収。

（こと） やすふみ・北海道大学大学院文学研究科教授